

# 作家の肖像

## 第4回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



### 1936- 横尾忠則

よこお・ただのり  
1936年兵庫県生まれ。美術家。  
ニューヨーク近代美術館、ステ  
デリック美術館、カルティエ現  
代美術財団など国内外の美術館  
で個展開催。パリ、ベネチア、  
サンパウロなどのビエンナーレ  
に出品。小説『ぶるうらんど』  
では泉鏡花文学賞受賞。2012  
年、神戸市に横尾忠則現代美術  
館、13年、瀬戸内海の豊島に  
豊島横尾館が開館。毎日芸術賞、  
紫綬褒章、旭日小綬章、朝日賞  
など受賞多数。

## ジャズピアニストのような人

「これから行ってもいいかな」。横尾さんはそうやっていつも突然電話をくれ、私の勤務する世田谷美術館へ自転車でふらりとやってきます。

思い返せば、私が当館に赴任して最初の訪問客も横尾さんでした。「館長就任のお祝いだよ」と、ご自身がパッケージデザインをしたお酒の箱を抱えてやってきました。でも、箱を開けてみたらお酒の瓶は入っていない。純粋にパッケージの箱をプレゼントしてくれたんですね。横尾さんらしいなと、うれしくなったのを覚えています。

2008年には当館で「冒険王・横尾忠則」という大規模な展覧会を開催しました。私は、横尾さんの制作のプロセスも紹介したいと思ったので、ポスターのアイデアスケッチや色指定紙なども合わせて展示しました。また、会期中に公開制作を行ってもらったのですが、こちらもたいへんすばらしかった。横尾さんは、その場の空気やお客さんが発するものを全身で感じ取って、それを作品に取り込むことのできる人です。即興で演奏するジャズピアニストのようだなと思いました。

## 「横尾劇場」

彼の描く絵は、どことなく演劇的な空間を想像させます。舞台があり、ストーリーがあり、役者がいる。私たちは、その「横尾劇場」を見ている観客です。

私が彼の作品の中でいちばん好きなのは、『ジュール・ヴェルヌの夢』。冒険的ロマンや少年がもつ純粋な心を感じさせてくれます。とはいえ、

けが  
汚れない作品という意味ではありません。横尾さんの作品には、必ず怪しくていかがわしい空気がただよっています。しかし、その空気があるからこそ、この作品では少年の純粋さが魅力的に浮かび上がっているのだと思います。

また最近、横尾さんは『日本の作家222』という画集を発行し、私も寄稿させていただきました。このシリーズも非常におもしろい。柴田錬三郎、松本清張など、怪物のような作家たちを見事に描ききっています。作家ごとに色使いや構図などの描き方が異なり、並べて見てみると圧巻です。

## 天賦の才能

彼は高校卒業後すぐに印刷会社へ就職したため、美術学校でアカデミックな技法を学んだわけではありません。しかし、美術への造詣は驚くほど深い。おそらく、一つ一つ自分の目で確かめて、会得していったのでしょう。また、三島由紀夫、三宅一生など、交友関係が幅広く、そこからさまざまなことを吸収し、次々と作品に生かしていった。とはいえ、彼は決して野心家ではないんです。ごく自然に生きてきた結果、そうなったという感じなんですね。だから横尾さんの仕事は、誰もまねすることができません。天賦の才能がなせるわざなのだ、私は思います。(談)

## 酒井 忠康

さかい・ただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／『ジュール・ヴェルヌの海』  
キャンヴァス アクリル、コラーージュ 227.3×181.3cm  
2006年 世田谷美術館蔵

左／『JASRAC』のポスター  
シルクスクリーン 103×72.8cm 1988年  
日本音楽著作権協会 ニューヨーク近代美術館蔵

右／日本の作家  
キャンヴァス アクリル 各33.4×24.3cm  
左から順に、柴田錬三郎(2007)、三島由紀夫(2007)、松本清張(2007)